

# ヴェネディクト・エロフェーエフの戯曲

## 『ワルプルギスの夜、あるいは総<sup>コマンドール</sup>督の足音』

神岡 理恵子

### 1. Венедикт Васильевич Ерофеев(1938-1990)と作品

ヴェネディクト・エロフェーエフは、代表作『モスクワ—ペトウシキ』(1969-70)で知られている作家である。この作品は世界各国で翻訳され、現在に至っても盛んに研究されている。本国ロシアでは、この作品がモダニズム文学からポストモダニズム文学への過渡的な作品であるとして重要な位置付けがなされてきた。また「エロフェーエフ研究」と言えば、イコール「『モスクワ—ペトウシキ』研究」という観があり、本国ロシアでは『モスクワ—ペトウシキ』一作品のみを取り上げた国際学会までも開催されているほどである<sup>1</sup>。またアメリカでも学位論文や「モスクワ—ペトウシキ論」集が出版されている<sup>2</sup>。

エロフェーエフの残した作品の数は少なく、短めの作品が多いが、しかしその作品世界や創作言語は非常に密度が濃く重層で、様々な角度からのアプローチを可能にさせる面白さを孕んでいる。ここで取り上げる戯曲『ワルプルギスの夜、あるいは総<sup>コマンドール</sup>督の足音』«Вальпургиева Ночь или Шаги Командора» (1985) (以下『ワルプルギスの夜』と略)は、エロフェーエフの中では長めの作品であり、また彼の初めてにして唯一の戯曲作品であるため、エロフェーエフの創作活動全体においても重要な位置を占める作品であると思われる。しかし雑誌掲載後<sup>3</sup>、モスクワを中心に上演は幾度か試みられてはいるものの、各国語への翻訳<sup>4</sup>をはじめ本国ロシアにおける作品の研究もまだ殆どなされていないのが現状である。

エロフェーエフの全作品は以下の通り。

1956-58年 Записки психопата

<sup>1</sup> Третья международная конференция «Литературный текст: проблемы и методы исследования». Анализ одного произведения «Москва-Петушки» Вен. Ерофеева. 18-21 мая 2000. : Тверской государственный университет.

<sup>2</sup> Martin, Marie R. From byt to bytie: The game of parody in the poetics of Venedikt Erofeev. Ph.D. Dissertation. University of Chicago, 1995., Venedikt Erofeev's Moscow-Petushki: Critical Perspectives. Karen L. Ryan-Hayes, Editor. New York: Peter Lang, 1997.

<sup>3</sup> 初出は「КОНТИНЕНТ」誌 №45(1985), 96-185頁。

<sup>4</sup> ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ポーランドといったスラヴ圏に留まっている。Ерофеев Венедикт. Вальпургиева ночь // Сборник.- София: Интер Принт, 1990. [ Вальпургиева ночь (прев. Иван Тотоманов): ст.179-292], Jerofejev Venedikt. Valpurgijska noc ili Koraci Komandora. Prev. Aleksandr Badnjarevic. -Novi Sad: Polja, 1985, Jerofejew Wenedikt. Noc Walpurgii albo Kroki Komandora// Dialog -Warszawa,1989, №1,ст. 39-86.

1962年 Благая весть または Благовествование

1969-70年 Москва-Петушки

1972年 Дмитрий Шостакович・・・「幻」の作品。原稿はパスポートと共に紛失。断片のみ残る。

1973年 Василий Розанов глазами эксцентрика

1982年 Саша Черный и другие

1985年 五幕の悲劇 Вальпургиева Ночь или Шаги Командора

その前後に未完の戯曲 Диссиденты, или Фанни Каплан

1988年 Моя маленькая лениниана

その他、創作メモ・ノート、日記多数。新聞、雑誌、単行本、インターネット等で断片的に出版されている。

## 2. 『ワルプルギスの夜、あるいは総督の足音』

エロフェーエフは『<sup>ドライ・ナフテ</sup>三夜』《Драй Нэхте》と題した戯曲三部作の執筆を計画していたが、『ワルプルギスの夜』はその「第二夜」となるはずのものであった。「第一夜」として計画された『イヴァン・クパーラの夜』《Ночь на Ивана Купала》は実際一部書かれてはいるものの完成を見ず、未完のまま『反体制者たち、あるいはファニイ・カプラン』《Диссиденты, или Фанни Каплан》という題名で、作者の死後「コンチネント」誌（67号）に掲載された。しかしながら「第三夜」『クリスマス・イヴ（降誕祭前夜）』《Ночь перед Рождеством》は、遂に書かれることはなかった。

このような壮大な計画のもとに唯一完成された『ワルプルギスの夜』は、「ボワローの（三単一の）法則」を厳守した「五幕の悲劇」であるということが、作者によってあらかじめ示されている。それは戯曲の冒頭に掲げられた、友人ムラヴィヨフに宛てた手紙の中に明らかである。実際ボワローの法則に従って、出来事は五幕を通して「第31番精神病院」と言及される精神病院の一角で、4月30日から5月1日未明にかけて起こる。以下、作品のあらすじをたどってみたい。

### 一幕

精神病院の診察室で繰り広げられる。救急車で担ぎ込まれたばかりのユダヤ人患者グレーヴィチと、彼を診察する医者とのやり取りが滑稽に描かれている。詩作をたしなみ知識豊富な主人公グレーヴィチは、医者への質問に対し、ヤンブでうたった詩や「ネクラソフばり」の即興詩、大袈裟なエピソードで応戦して話をはぐらかす。ここでは医者や病院職員たちのありきたりな質問や言葉に対し、豊富で自由な言語を操る主人公の生き生きとした様子が対照的に描き出されている。ロシア現代演劇を論じたグローモヴァによれば、作者の主な「戦闘領域」は、主人公レフ・グレーヴィチと同様に「言語」であり、一幕は、グレーヴィチが医者に勝利する「言葉の決闘」であるという<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> Громова, М. Русская современная драматургия. -М:ФЛИНТА·НАУКА, 1999. С.134-135.

また一幕では、医者への質問をはぐらかす主人公の詩やナンセンスなエピソードによって、「時間の引き延ばし」が行われている。これは歌や踊りの導入によりストーリーの速度が上がっていく五幕とは対象的である。また「海の冒険者」<sup>6</sup>グレーヴィチの語るナンセンスなエピソードに見られる「世界の旅」のモチーフは、五幕で3号室の患者たちによって展開される「世界の国々を巡る議論」へとつながって、発展される。

主人公は以前にもこの病院に担ぎ込まれたことがあり、当時恋愛関係にあったと見られる看護師ナタリーと診察室で再会する。この二人の様子はのちの三幕で発展される。診察後、前回より酷い重度のアルコール中毒と診断され、半年の入院・治療を宣告されたグレーヴィチは3号室へと運ばれる。

## 二幕

3号室で行なわれている「裁判ごっこ」の場面で始まる。3号室には室長プローホロフを中心に総勢9名の患者が暮らす。この日は、海軍少将ミハルィチを被告とする裁判が行われていた。この3号室ではプローホロフを裁判長に、毎日このような「遊戯」が行われているのである。ナンセンスにでっち上げられた諸々の罪には、当時の時事問題やソヴィエト・プロパガンダのパロディ等が滑稽に描き出されている。刑を宣告され、ベッドに縛られたミハルィチの悲鳴を聞きつけた看護師リュージーが、様子を見に来る。そして立ち去るリュージーと入れ替えに、新患グレーヴィチが連れて来られる。室長プローホロフは彼に病院の掟や生活模様を説明する。

その後、医者たちの回診があり、「起立」の指示に従わない数名の患者(この中にはグレーヴィチもいる)に暴力や荒療治が施される。ここでは病院側の一方的な暴力や権力の行使が、「言葉」と「行為」の両面から無慈悲に描かれる。一方、患者たちの抵抗は一切無駄であるという無力さも対照的に描かれている。罰として注射を打たれたグレーヴィチは、酷い痛みと副作用に苦しむ。それを知った上で看護師ボーリャは、その晩病院で行われるメーデー前夜のパーティーに誘う。「必ず行く」と答えたグレーヴィチは、室長とともに復讐を誓う。ここには「ドン・ファン」のモチーフが導入されている。

## 三幕

ところ変わって処置室。ここには宿直のナタリー看護師が控える。衝立てを挟んだすぐ向こうでは、注射を待つ患者が列をなしている。この処置室へグレーヴィチがやってくる。ナタリーが病院内の鍵を手に入れていることを耳にしたため、その鍵束を目当てにかつての恋人ナタリーを口説き始める。ここでの二人のやり取りは、交互に詠み交わされる詩の形式で行われる。しかし二人の「詩的」な言葉のやり取りとは正反対に、衝立て越しに列をなす患者たちに注射を施す看護師タマーラの罵言や大声、猥雑な言葉が対照的に描き出されているのも特徴的である。こうした病院の喧騒とは隔離されたような処置室で、主人公とナタリーの時間はゆっくり流れていく。グレーヴィチはこうしてナタリーに近付き、ついに鍵束を手に入れると、迎えにきた室長プローホロフとともに病院の備品であるアルコ

---

<sup>6</sup> ここにはバイロン「チャイルド・ハロルドの巡礼」「海賊」からプーシキン『エヴゲーニー・オネーギン』に連なるエピソードのパロディが見られる。

ール(спирт)を盗みに行くのである。

#### 四幕

再び3号室。注射や夕食から徐々に戻り始めた患者たちの談話が描かれる。しかし冒頭からヴォーヴァ老人の全く辻褃の合わないナンセンスなモノローグが続き、そこに加わっていく他の患者たちの会話が「不条理演劇」的な手法も交えて描かれてゆく。そこへ「回診」を装って、室長とグレーヴィチが盗み出した「スピリッツ」を手に戻って来る。二幕の「裁判ごっこ」と同様、ここにも劇中劇のような「遊戯」が挿入されている。患者が医者を真似、平常の役割が転倒した「カーニバル的」なプレイである。

こうして、メーデーの前夜祭を祝う病院職員たちに対抗するかのよう、彼らのワルプルギスの夜の宴が始まる。患者たちは詩やユーモアを交え、気の利いたエピソードを順に話してゆき、酒を飲み干してゆく。途中でナタリー看護師が見回りに来て、全員寝たふりをする。しかし彼女も酔っているため、3号室の異変に気付かない。そしてナタリーが3号室を出て行くと、すぐさまベッドから起き上がった患者たちは、「ワルプルギスの夜」の乱痴気騒ぎを再開するのである。

#### 五幕

夜明けが近い、様変わりした3号室。ワルプルギスの酒宴は続く。患者たちは歌い、踊り続ける。五幕は冒頭から「チャストゥシカ」を取り入れた歌や詩の導入によって、戯曲の進行速度は急速に上がっていく。患者は自分たちのワルプルギスの酒宴を謳歌する。そして病院内の別の場所で行われている職員たちのメーデー前夜のパーティーと比べて、自分たちがどんなに自由で素晴らしいかを述べたり、また世界の国々を巡る議論を交わしつつ、ロシアへの愛着を語っていく。

そうこうしているうちに、二幕での回診の際、指示に従わず電気ショックを施された患者ホフーリャ老人が息を引き取る。そして彼の死を皮切りに、その後バタバタと患者たちが倒れていく。しかし死体の傍らで、乱痴気騒ぎは続く。

最終的に、視力を失いつつある室長とグレーヴィチだけが残る。盗み出したスピリッツが「何か違うものだ」と気付いた室長は、これは「企み」だとしてグレーヴィチを責める。これまでの陽気で喜劇的な戯曲の雰囲気は、ここから不穏で悲劇的なものに一変する。しかし二人は和解して最後の一滴まで飲み尽くす。グレーヴィチは最後の力を振り絞り、看護師ボーリャの招いた夕食ならぬ「朝食」へと向かう。一方横たわっていた室長は、力の限りに叫ぶ。病院じゅうに響き渡ったその叫び声を聞き、医者や看護師たちが駆けつけてみると3号室は死体の山と化していた。

この時、主人公たちが盗み出し患者たちが残らず飲み干したものが、病院に備蓄されていた全メチルアルコールであったと判明する。死体は(息ある者まで)担架で霊安室に運び去らる。廊下でグレーヴィチに出くわした看護師ボーリャは、死にゆく彼を罵りながら殴り続ける。これは幕が閉じてもなお舞台の向こうで続けられる。戯曲は、「拍手は無用」という言葉で結ばれている。

### 3. 『ワルプルギスの夜、あるいは総督コマンドールの足音』の上演・研究状況

この戯曲は 1980 年代後半からモスクワの劇場で上演されているが、現在モスクワでこの戯曲を上演しているのは、「ユーゴ・ザーパド劇場」である<sup>7</sup>。1989 年 7 月 22 日の初演から、現在でもレパートリーに加えられ、実に 10 年以上も上演されている。「ユーゴ・ザーパド劇場」と並んで早くから上演されていたものに、「モスクワ大学学生劇場」の上演があげられる。現時点では初演の詳しい情報が得られないままであるが、1989 年にエロフェーエフ自身が鑑賞したという記録がある<sup>8</sup>。この上演は、「エロフェーエフのテキストから一語たりとも削除せず、上演は 5 時間以上（四幕から成っていた！）も続いた」<sup>9</sup>ものであったようだ。

また同じ頃、あるいは上記の二つの劇場より少し早く、「マーラヤ・ブロンナヤ劇場」でも上演されていた。しかしながら二幕から成るこの上演は、テキストからユダヤ人問題の記述や MAT、フィナーレで描かれる「死体の山」などがほぼ削除され<sup>10</sup>、「極限にまで簡素化された」この上演を作者は気に入らず<sup>11</sup>、成功と考える関係者や観客はあまりいなかったようである。また 1988 年の時点で「プーシキン劇場」が、同じくテキストから上記のような問題を削除した上でこの上演を要請したことがあったようだが、これは実現しなかったようである<sup>12</sup>。このほか「ペルミ青年劇場」が 1999 年 10 月に初演を行っており<sup>13</sup>、2000 年 12 月にはモスクワ公演も行っている。

一方で、近年この戯曲がロシアの現代文学のみならず、演劇の分野からも重要な位置を占めるものであることが、ようやく論じられ始めている。現代における「言葉なき、音なき、意味付けられた身振りなき言語で観客に何らかの演劇テキストを伝えようとする」前衛劇が一方の極に存在するが、エロフェーエフは言語の演劇として、「現代ロシア演劇に舞台言語の革新の可能性を開いた」という見方もある<sup>14</sup>。ロシア・ポストモダニズムという流れ全体を取り扱うような研究書の中では、重要な作品として取り上げられており、1980 - 1990 年代のロシア演劇で重要な(劇)作家サドゥールやソローキンとともに論じられてい

<sup>7</sup> 論者もこの劇場での上演を、2000 年(5/24)に鑑賞した。またユーゴ・ザーパド劇場での上演状況は Колесова, Н. Евангелие русского экзистенциализма// Советская культура, 06.01.1990. С.10, Вен. Ерофеев. Вальпургиева Ночь// Призвание –«Юго-Запад». По материалам архива театра. –М., 2002. С.134-135 等の記事がある。

<sup>8</sup> Шмелькова, Н. Во чреве мачехи, или жизнь – диктатура красного. –СПб., Лимбус Пресс, 1999.С.96-98.

<sup>9</sup> Панин, Л. Веселая трагедия в театре МГУ // Театральная жизнь 1991, № 20, С.14-15.

<sup>10</sup> Там же. またこの劇場での上演評は Хлопьянкина, Т. Рожденные под знаком качества //Театральная жизнь № 3, 1990 等がある。

<sup>11</sup> Тосунян, И. Венедикт Ерофеев «Быть русским - легкая провинность». Штрихи к портрету. Записные книжки. Составление, интервью, комментарии Ирины Тосунян. –СПб., 1999. С.5-6.

<sup>12</sup> Шмелькова. Указ. соч. С.60.

<sup>13</sup> Н. Земскова による上演評がある。

<http://nevod.perm.su/local/zvezda/1999/10/29/page4.shtml>

る。しかしながら現時点では、劇評以外にこの戯曲を取り上げた研究は、まだ非常に少ない。以下、本戯曲を単独で扱っている論考を挙げておく。

- ① Громова, М.И. Драматургические опыты Венедикта Ерофеева // Русская современная драматургия. –М., ФЛИНТА·НАУКА. 1999. С.133-140.
- ② Скоропанова, И.С. Карнавализация языка: пьеса Венедикта Ерофеева “Вальпургиева ночь, или Шаги Командора” // Русская постмодернистская литература. –М., ФЛИНТА·НАУКА. 1999. С.332-356.
- ③ Лейдерман, Н.Л., Липовецкий, М.Н. Венедикт Ерофеев «Вальпургиева ночь, или Шаги командора» (1985) // Современная русская литература. Новый учебник по литературе в 3-х книгах. Книга 3, В конце века (1986–1990-е годы). –М., УРСС. 2001. С.68-70.
- ④ Кривулин, В. Ерофеев-драматург. <http://www.litpromzona.narod.ru/krivulin7.html>
- ⑤ 真木三三子「*「Вальпургиева ночь, или Шаги Командора」*—訳註の試み—」平成15年度  
日本ロシア文学会東北支部会（2003年6月28日、福島大学）報告資料
- ⑥ 拙稿「ヴェネディクト・エロフェーエフの戯曲『ワルプルギスの夜、あるいは総督の足音』の世界——悲劇とカーニバル——」平成15年度 日本ロシア文学会関東支部春季研究発表会（2003年5月10日、早稲田大学）報告資料
- ⑦ 拙稿「*Вальпургиева ночь, или Шаги Командора*」 Венедикта Ерофеева: черты классицизма и античного театра // Драми и театр. Сб. науч. тр. Тверь: Твер. гос. ун-т, 2002. Вып. 4. С. 188-192.

エロフェーエフ研究においてまず行なわれているのが、注釈的研究である。それは本国ロシアにおいてもまさに盛んなものであり、『モスクワ—ペトウシキ』に関しては既に Левин, Ю. Комментарий к поэме “Москва-Петушки” Венедикта Ерофеева. Materialien zur Russischen Kultur. Band 2. Graz: Издательство Хайнриха Пфайдла, 1996., Власов, Э. Бессмертная поэма Венедикта Ерофеева “Москва—Петушки”: Спутник писателя. –М., Вагриус, 2000 といった大きな仕事がある。同様に『ワルプルギスの夜』を論じる際にも（論における比重の大小はあるが）まず注釈的アプローチが取られており、合わせてエロフェーエフの文体、引用、レミニッセンス、アリュージョン、パロディ等の問題が取り上げられている。

例えば上記②のスコロパノヴァ(Скоропанова)は注釈的な問題に加えて、『ワルプルギスの夜』の中でも大きな比重を占めている「カーニバル」という問題にも触れている。また対照的に④のクリヴーリン(Кривулин)の論文では、注釈的な研究が「悲劇」（特に古典

---

<sup>14</sup> Громова. Указ. соч. С.138-139.

悲劇)という観点から主に行なわれている。『ワルプルギスの夜』において「カーニバル」という問題も「悲劇」という問題も、ともに非常に重要な位置を占めているのだが、しかしこの二つの問題点を同時に取り上げて論じることはこれまで行なわれていない。『ワルプルギスの夜』で焦点となるのは、この「カーニバル」、「悲劇」という二つの異なるジャンルが、一つの作品の中で互いに拮抗している緊迫感であるように思われる。両者は「メニッペア」、「古代ギリシア悲劇」といった古くからのヨーロッパ文化の伝統的なジャンルに起源を持つ、非常に大きなテーマである。さらにこういった異なる概念同士が同時に描き出されるという特徴は、エロフェーエフの創作において本質的なものである。『モスクワペトウシキ』や『ある奇人の目を見たワシーリー・ローザノフ』ほかのエロフェーエフ作品においても「聖と俗」、「自我と分身」、「素面と酩酊」など様々なテーマにおいて描き出されており、『ワルプルギスの夜』を研究する際にも視野に入れておきたい問題だ。

#### 4. 「精神病院」という場と時代背景

『ワルプルギスの夜』において舞台となる「精神病院」も、見逃せない問題である。ロシアでは『赤い花』(1877)や『六号室』(1892)に見られるように、「精神病院」を舞台にした小説が多数書かれてきた。「正常」と「異常」を対置させ、その境界が非常に曖昧であること、また「狂人」の内面的な考察、あるいは「監獄」や「収容所」との類似からそれらと「精神病院」を対比するなど、描かれ方は様々だ。しかしソヴィエト時代において「精神病院」を取り上げるとき、新たに「ソヴィエト権力」と「自由」という問題が加わる。ソヴィエト精神病院の実体は明るみに出され、批判の対象となった。その様子は以下の記述にも見られる通りである。

ソ連政府が政治犯を精神病院に強制収容していることは周知の事実だが、一九七五年の政府当局の公式発表によると、収容者は七十人余ということになっている。治療当事者は政治犯を「ノルマに移す」というジャルゴン隠語のもとに、見込みのない患者たちのいる小部屋に押しこめ、無気力と悪寒をもたらすアミナジン、体温を高め、腫瘍、関節リウマチ、頭痛、衰弱などの症状をおこすサルファジンその他の大量の注射、投与を指示する。そのため重病人とかわらぬ様相を呈し、しばしば失神状態に陥り、無気力になって平常の生活を営むことができなくなる。注射と投薬が中枢神経の働きを鈍らせるのである。(『現代の拷問』アムネスティ・インターナショナル編、一九七五年、その他)<sup>15</sup>

『ワルプルギスの夜』の主人公も、まさに上の引用に記されている「サルファジン」注射を打たれ、副作用に苦しむ様子が描かれている。そして「アミナジン」保管室で列をなす患者たちに、看護師が注射を打つ場面もある。『ワルプルギスの夜』は、まさにこうした社会と時代を背景に描かれた作品だ。

1960年代以降サミズダートで流布したヴァレリイ・タルシスという作家には、チャーホ

<sup>15</sup> 川崎浹『ソ連の地下文学』朝日新聞社、1976、161頁。

フの『六号室』のパロディのような『七号室』(1974)という作品がある。そこで描かれている患者たちのタイプは、三種類(自殺の失敗者、「アメリカ病」、日常を逃れ自ら希望した者)<sup>16</sup>に分類されている。もう一つのタイプがあるとすれば、「アルコール中毒者」であろう。ソヴィエトの精神病院はアルコール中毒患者の治療の場としても機能していた。そして何を隠そう、戯曲を執筆する以前にエロフェーエフ本人にもこうした体験があったことは、よく知られている。『ワルプルギスの夜』ではまさにアルコール中毒患者たちが、3号室で禁断の酒宴を催すのである。

一方、これら二作品よりは少し前のことであるが、1962年にアメリカでケン・キージーによる『カッコーの巣の上で』が出版された。この作品とエロフェーエフの戯曲の類似は研究者たちに既に指摘されており、またエロフェーエフ本人もこの映画を非常に気に入ったという記録がある<sup>17</sup>。

「精神病院」のモチーフは、しばしば「カーニバル」と結びつく。バフチンの述べる「敷居上の時間」——《生活から切断された生活》(つまり、一般的な日常生活から切断された生活)、《意識の最後の瞬間》——といった「時間」を持つ独特な「空間」であり、さらにそこでは「カーニバル化された集団」が生活している<sup>18</sup>。日本文学においても、同じ頃「精神病院」と「カーニバル」を同時に描き出した作品として、武田泰淳の『富士』(1969-71)が挙げられる<sup>19</sup>。このように20世紀後半、ソヴィエト以外でも同時多発的に「精神病院」を巡る作品が書かれているのも興味深い。フーコーも『狂気の歴史』(初版は1961年)を書いている。

ソヴィエトでペレストロイカが始まるのは1985年だが、同年初頭に短期間で書き上げられた『ワルプルギスの夜』は、行き詰まった当時のソヴィエト社会を映し出している。そこにはキージーが描いたような脱出や、希望といったメッセージは存在しない。患者たちは全滅し、あとに残るのは出口のない精神病院、医局側の無慈悲さ、変わらない体制と日常といった絶望感である。

## 5. 近年のエロフェーエフ周辺

エロフェーエフが没した直後、彼を早くも「神話化」、「聖列」する動きと、それに反論する動きがあり新聞・雑誌を賑わせていたが、それからほぼ10年たった2000年前後から、エロフェーエフ周辺の出版ブームとも言えるような動きが見られた。それまで95年に一卷本全集(Венедикт Ерофеев. Оставьте мою душу в покое. Почти все. —М., Х.Г.С.)が出版されていたが、著作権がВагриус社に移り、2000年頃から2002年にかけて一連の新たな全集(Венедикт Ерофеев. Записки психопата. Вагриус.—М., 2000、註4参照)

<sup>16</sup> 前掲書 236頁。なおタルシスと『七号室』についても前掲書に詳しい。

<sup>17</sup> Шмелькова. Указ. соч. С.60.

<sup>18</sup> М.バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男、鈴木淳一訳 ちくま学芸文庫、1995、346-347頁。

<sup>19</sup> この作品と「カーニバル」に関する詳細は、井桁貞義『ドストエフスキー 言葉の生命』群像社、2003、429-439頁を参照されたい。

や作品ごとのポケット版、エロフェーエフ本人の朗読テープ付きのものや絵本仕様の『モスクワ-ペトウシキ』も出版された。しかしながら 95 年版と 2002 年版の全集を比べてみると、前者に収録されている作品が後者には収録されていなかったり、また逆も然りという状態である。インタビュー、創作ノート、日記等も次々と出版されてはいるが、体系的に整理されることが望まれる。2000 年には詳細な註釈付きの『モスクワ-ペトウシキ』（Власов, Э. 前掲書）も現れて話題を呼んだ。晩年エロフェーエフと親交のあったシュメリコワによる回想録（註 9 参照、Шмелькова, Н. Последние дни Венедикта Ерофеева. Дневники. –М., Вагриус, 2002）や、インタビュー等をまとめたもの（註 12 参照）も出版されている。

一方研究分野に関しても、本稿の冒頭でも記したような国際学会が 2000 年 5 月に開催されたり、戯曲『ワルプルギスの夜』の研究論考が登場してくるのもこの頃である。この国際学会には論者も出席した（この時は見学しただけであった）が、エロフェーエフ直筆サイン入りの雑誌を持参する人や『モスクワ-ペトウシキ』を誦んでいる人なども多数おり、研究とは別に熱く作品・作者への思いを語る、実にカルト的なファンの集いのような印象も受けた（研究発表は非常に真摯なもので、多くの刺激を受けた）。

またエロフェーエフ生誕 60 周年を迎えた 1998 年 10 月 24 日には、大勢でクルスク駅からペトウシキへ小旅行するイベントも大々的に行なわれたようだ。論者も留学中に「ペトウシキ詣で」を行なったが、考えていたよりもはるかに何もない場所であった（当初 2000 年の 10 月 24 日に予定していたが、いざクルスク駅に到着してみると、ただでさえ便の悪い時刻表が当日変更されており、日を改めざるを得なかったという苦い思い出でもある）。

2000 年夏にはモスクワの「プーシキン美術館」でボリス・メッセレルの企画展が行なわれ、中でも「ヴェネディクト・エロフェーエフへのレクイエム」というインスタレーションが話題を呼んだ。無数の空き瓶に蠟燭が立てられ、その合い間にエロフェーエフの写真が飾られていた。メッセレルは妻のヴェーラ・アフマドゥーリナとともに、エロフェーエフの生前に親交があり（二人は『モスクワ-ペトウシキ』にも登場する）、その様子はこの企画展のカタログでも紹介されている<sup>20</sup>。

---

<sup>20</sup> Мессерер, Б. Композиции и натюрморты, станковая графика и инсталляции. Каталог выставки. –М., ГМИИ им. А.С. Пушкина. 2000.